

中学校における合唱指導に関する一考察

－アンケート調査の分析を中心に－

浅藤 敬子

(本講座大学院博士課程前期在学)

I. 研究の動機と目的

かつて筆者が、中学校に音楽教師として勤務していた1980年代は、校内暴力が多発した時期であった。そのような状況下でそれぞれの学校は、生徒が自主的に意欲をもって取り組める行事や活動を生徒と一緒に模索した時代でもあった。「合唱」は、しだいに全校の取り組みの象徴となり、荒れた学校だけでなく集団活動として多くの学校に浸透していった。筆者の勤務していた学校でも、学校行事として毎年、市の文化会館を借りて合唱際が行われ、保護者だけでなく一般市民にも公開されていた。

それから16年経た現在、音楽の授業が著しく削減された状況下で、授業や学校行事のあり方も変化していると予想される。そこで現場の音楽教師にアンケートを行い、中学校では現在も合唱活動は存在しているのか、合唱指導はどのようにおこなわれているのか、合唱活動の意義、行事とのかかわりなどを調査した。また筆者は、ア・カペラを合唱指導に導入することで、合唱の能力を高められるのではないかと考え、ア・カペラに関する質問項目を入れた。このアンケートをもとに現状を把握し、教師の考えを明らかにすることによって、今後の合唱指導の望ましいあり方を検討することを研究の目的とする。

II. 調査の方法および質問項目の内容

- 1 調査の期間 2007年2月17日～2007年3月31日
- 2 調査対象者 A 県市立中学校326校の音楽科教師
- 3 実施方法 郵送によりアンケートを依頼、回収

質問1：性別、年代、教員経験年数、大学での専攻に関する質問。

質問2：教師が音楽の授業で生徒にどのように接しているか、また授業規律をどのように考えているのかを知るための項目。回答方法は、5段階評価である。

質問3：教師が授業での合唱の意義をどのように考えているのかを知るための項目。回答方法は、5段階評価である。

質問4：教師が合唱指導に関してどのように考えているのかを知るための項目。回答方法は、5段階評価である。

質問5：1時間の授業で、合唱（輪唱や副旋律も含む）活動の平均時間についての質問。

質問6：学校内で特別活動、C学校行事、②学芸的行事の合唱活動の有無に関する質問。

質問7：部活動（合唱、吹奏楽、オーケストラ）の有無に関する質問。回答方法は、選択肢。

質問8：授業にア・カペラを取り入れることに関する自由記述。

質問9：合唱の授業で最も苦勞していることに関する自由記述。

質問10：合唱で最も感動したことに関する自由記述。

Ⅲ. 調査の結果と考察

1 回収率 326校のうち、125校、126人より回答を得ることができた。回収率は、38%であった。

2 質問1：に対する回答

(1) 性別

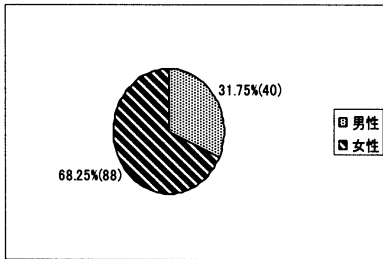


図1 性

回答者は女性が非常に多く、86人（68%）を占めており、男性は40人（32%）と少ない。

(2) 年齢構成

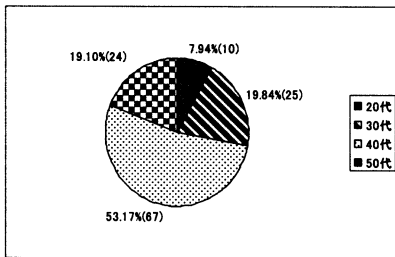


図2 年齢構成

年代別では40代の教師が53%を占めており続いて50代（19%）、30代（20%）であり、非常にベテランの教師が多い。

(3) 経験年数

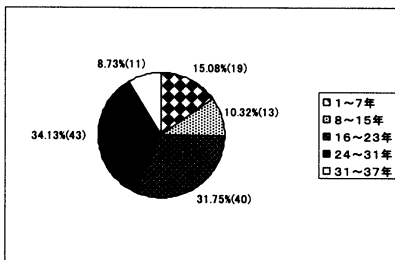


図3 経験年数

経験年数をみると、24年～31年が34%、16年～23年が31%と続き、経験豊かなベテランの教師が多い。

(4) 専門分野

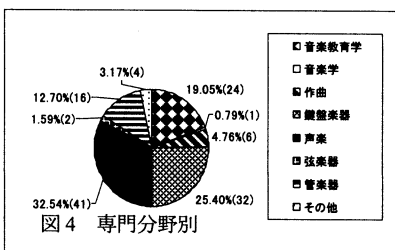


図4 専門分野別

専門別では、声楽（33%）、鍵盤楽器（25%）、音楽教育学（19%）、管楽器（13%）、作曲（5%）、弦楽器（2%）、音楽学（1%）、その他（3%）で指揮と打楽器の専門はいなかった。その他の内訳は、情報音楽1、初等教育1、無記入2であった。

3 質問2：に対する回答

(1) 授業での生徒の接し方と授業規律

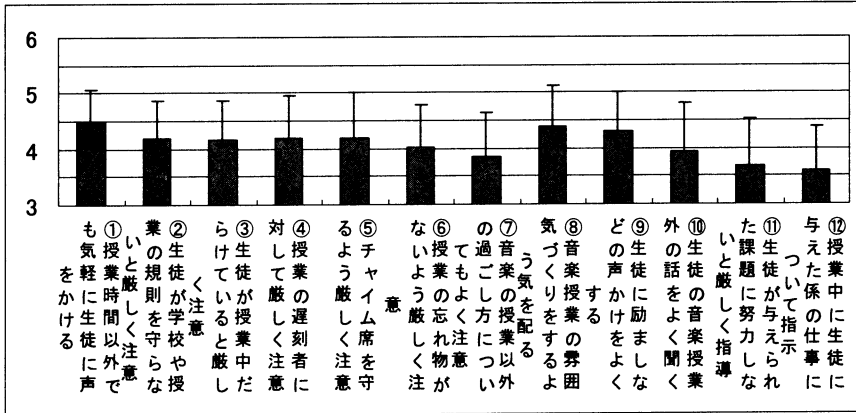


図5 質問2：の平均値と標準偏差 (全員)

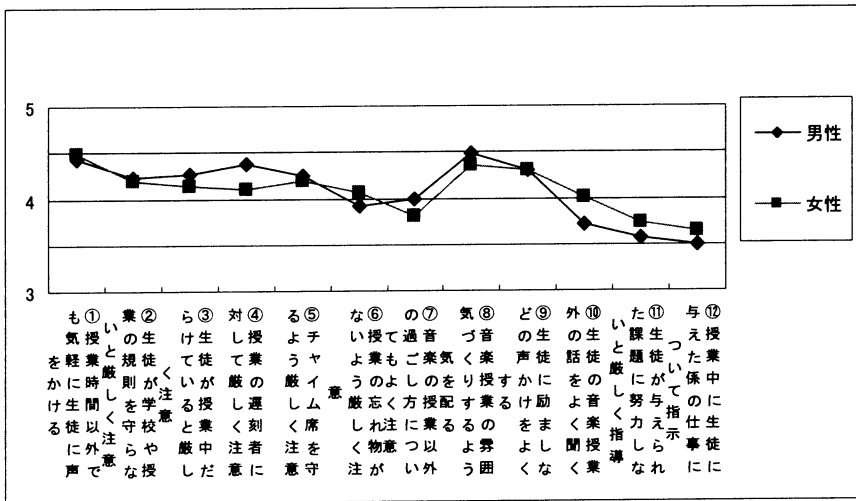


図6 質問2：の平均値 (性別)

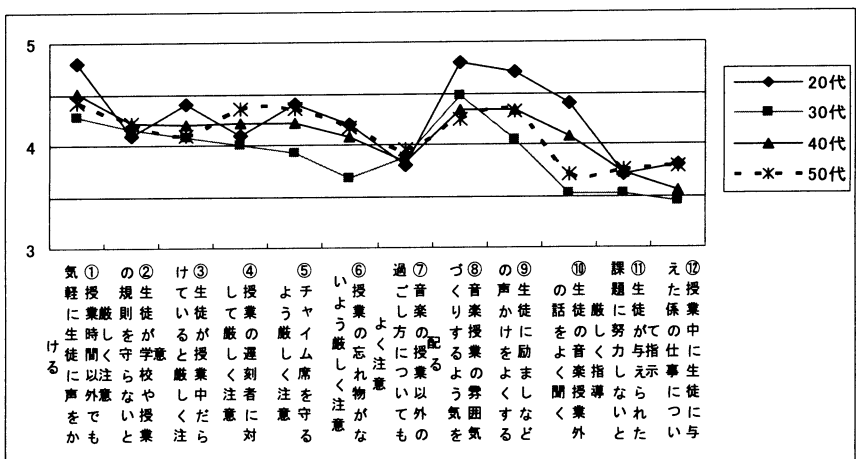


図7 質問2：の平均値 (年代別)

質問2：「教師が音楽の授業で生徒にどのように接しているか」を検討する。図5が示すように、最も平均値が高いのは「①授業時間以外でもよく気軽に生徒に声をかける。」、次は「⑧音楽の授業の雰囲気づくりをよくするよう気を配っている。」、次は「⑨生徒に励ましなどの声かけをよくする。」、であった。この結果から、音楽の教師は、生徒に対して親和的に接することが多いことがわかった。男女の差は、ほとんどみられなかったが、遅刻者に対しては、男性教師の方にいくぶん厳しさがみられた。図7（年代別）から20代、40代、50代では、「①授業時間以外でもよく気軽に生徒に声をかける」の平均値が最も高くなっていることから親和的な態度を心がけている教師が多いといえる。授業規律を厳しく考えているのは、20代と50代であり、とくに50代の教師は、「遅刻者」や「チャイム席」に関して厳しく指導していることもわかった。年代間で大きく差がみられるのは、20代と30代であるが、経験が増した30代は20代よりもより慎重に指導していることのあらわれであると思われる。次に質問2「教師が音楽の授業で生徒にどのように接しているか」の12項目について因子分析を行った。基本方針として回転後の因子パターンにおいて絶対値.40以上の因子負荷量を示した項目の内容を中心として因子を解釈することにした。その結果、2因子解が適当であると判断した。この時の累積説明率は、2因子合計98.34%であった。因子1は、生徒に対し励ましなどの声かけをよくすることから「親和型」と命名し、因子2は、生徒に対して厳しい態度で指導していることから「管理型」と命名した。その因子分析の結果を表1に示す。

表1 質問2：に関する因子分析表

因子	質問項目	因子負荷量	
		1	2
第1因子 親和型の因子	9 生徒に励ましなどの声かけをよくする。	.811	.013
	12 音楽の授業中に生徒に与えた係の仕事についていろいろ指示する。	.786	.046
	10 生徒の音楽授業外での話（勉強、部活動、友人関係）をよく聞く。	.751	.162
	11 生徒が与えられた課題に対して努力しないと厳しく指導する。	.714	.250
	8 音楽の授業の雰囲気づくりをよくするよう気を配っている。	.697	.078
	7 生徒の音楽の授業以外の過ごし方についてもよく注意する。	.471	.327
第2因子 管理型の因子	4 授業の遅刻者に対して厳しく注意する。	.136	.845
	3 生徒が授業中だらけていると厳しく注意する。	.133	.775
	5 チャイム席を守るよう厳しく注意する。	.000	.747
	2 生徒が学校の規則や授業の規則を守らなかったとき厳しく注意する。	.245	.747
		.006	.734

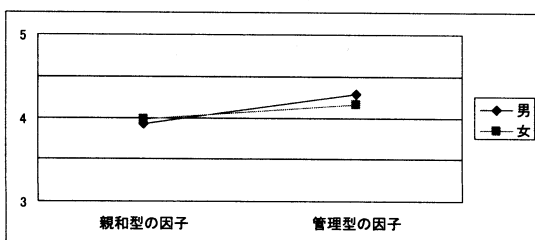


図8 男女因子別平均値

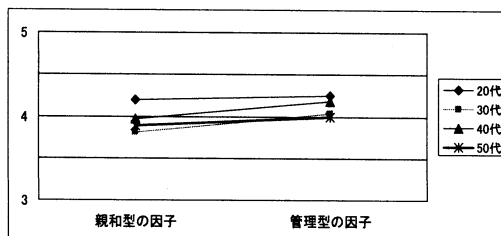


図9 年代ごとの因子別平均値

図8によると、男性の教師と女性の教師では、女性の教師のほうが親和的であることがわかった。一般的な世間の教師の評価でも、男性教師のほうが厳しいとみられていることが結果としてあらわれたといえる。図9では、20代の教師が親和型も管理型も平均値が高いことがわかった。逆に30代、50代の平均値が低く、40代が中間であることがわかった。若い教師のほうが生徒に対し「親しみやすさ」と「厳しさ」が同程度にあり、経験が増すごとに「管理的」な態度を前面に出していることがわかった。これらの因子別得点に有意差があるか検討するために分散分析をおこなった。親和型因子に関して、性別×年代別の分散分析をおこなったが男女間にも年代間にも有意差はみられなかった。次に管理型因子に関して、性別×年代別の分散分析をおこなったが、男女間にも年代間にも有意差はみられなかった。

4 質問3：に対する回答

(1) 合唱の意義

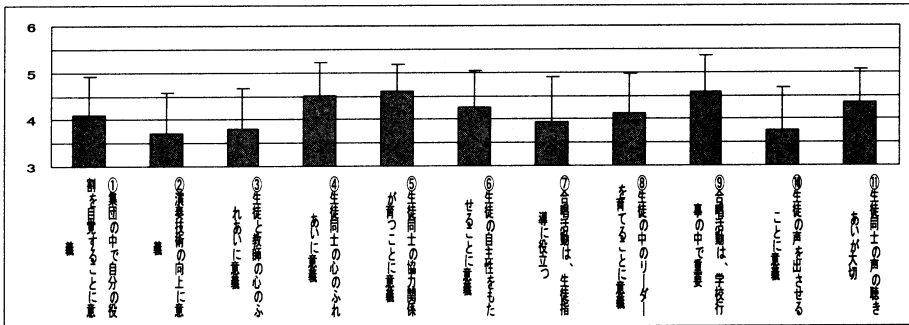


図10 質問3：の平均と標準偏差（全員）

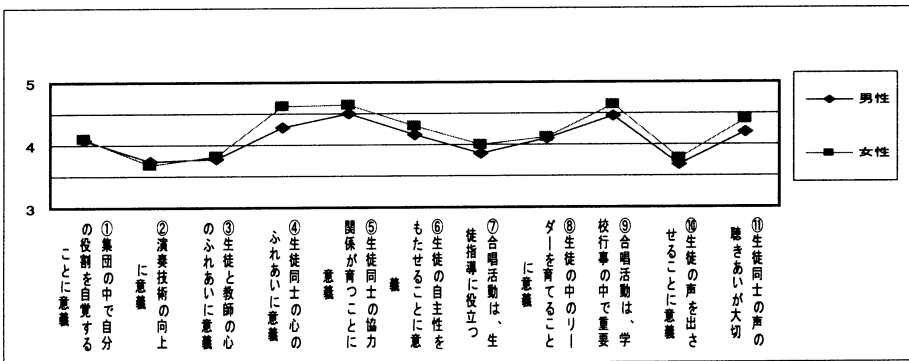


図11 質問3：の平均値（性別）

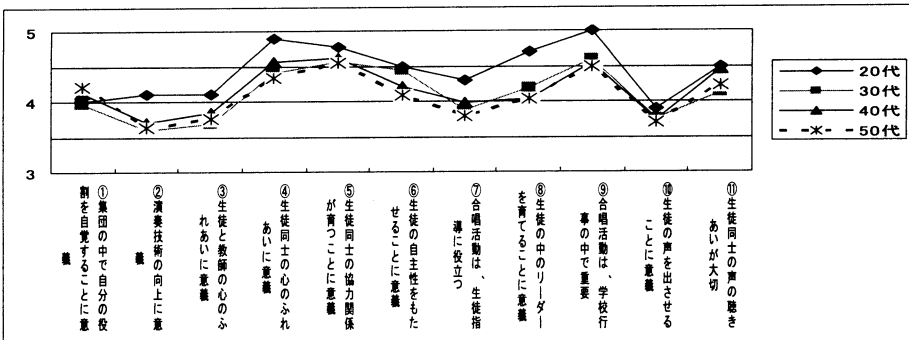


図12 質問3：の平均値（年代別）

質問3「教師が授業の合唱の意義をどのように考えているか」に関して図10が示すように、最も平均値が高いのは「⑤合唱活動は、生徒同士の協力関係が育つことに意義がある。」、次は「⑨合唱活動は、学校行事の中で重要である。」、次は「⑤合唱活動は、生徒同士の心のふれあいに意義がある。」であった。最も平均値が低いのは、「②合唱活動は、演奏技術の向上に意義がある。」で、次に低いのは「⑩合唱活動は、生徒に声を出させることに意義がある。」であった。音楽教師が中学校でめざす合唱活動の意義は、「生徒同士の協力関係」「学校行事との連携」「生徒同士の心のふれあい」であり、演奏技術や声を出させる事ではなかった。これは中学校という思春期にある生徒達が、自分の存在ばかりをみるのではなく、友達（生徒同士）の存在も意識しながらお互いの関わりの中で成長し、集団との関わりが成長をより大きなものにするからだと考える。しかし一方では、合唱の意義として、「⑩合唱の授業は、生徒同士の声の聴きあい」が大切である。」も全く否定してはいない。そこで「現在授業で、生徒の声はでているか」、「現在授業では、生徒同士の聴きあいができているか」、という質問の結果を示す。

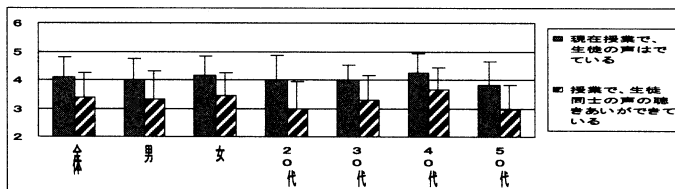


図13 現在の授業の聴きあいに関する比較（全体、男女別、年代別）

「現在授業で生徒の声はでているか」という質問に対して、図13から生徒の声はよくでているという結果がえられた。次に「現在授業で、生徒同士の声の聴きあいができているか」、という質問では、全体にあまりできていないという結果で、特に20代と50代ができていないと感じている。度数を男（図14）女（図15）別に検討するとどちらも「全く当てはまらない」は0人であった。「授業で、生徒同士の声の聴きあいができている」については、女性の方が男性よりできていると感じていた。

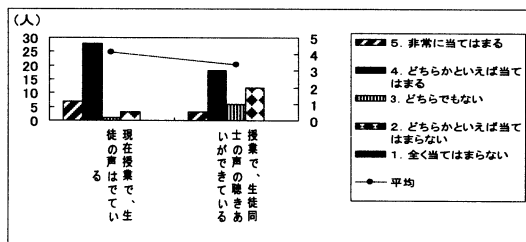


図14 男性5段階別（声と聴きあい）

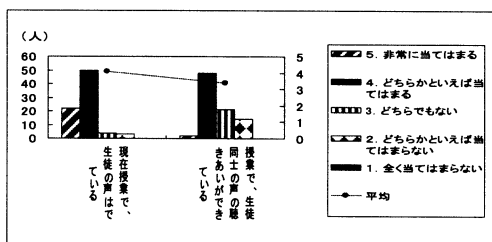


図15 女性5段階別（声と聴きあい）

5 質問：4に対する回答

(1) 合唱指導

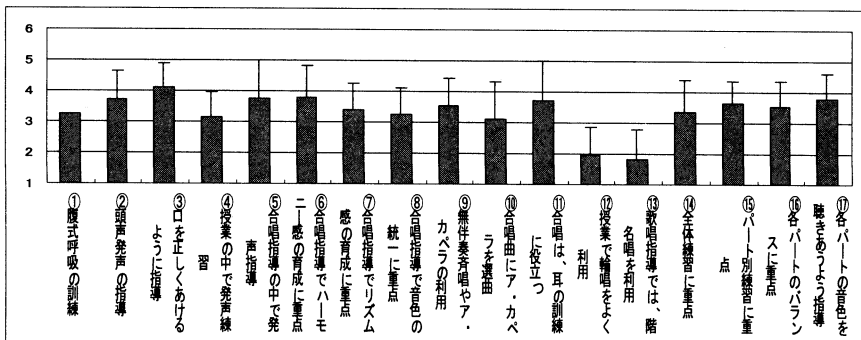


図16 質問4：の平均値と標準偏差（全員）

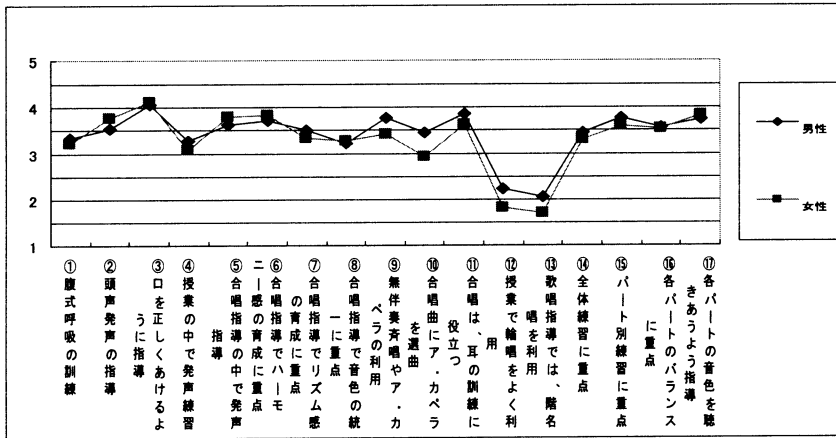


図17 質問4：の平均値（性別）

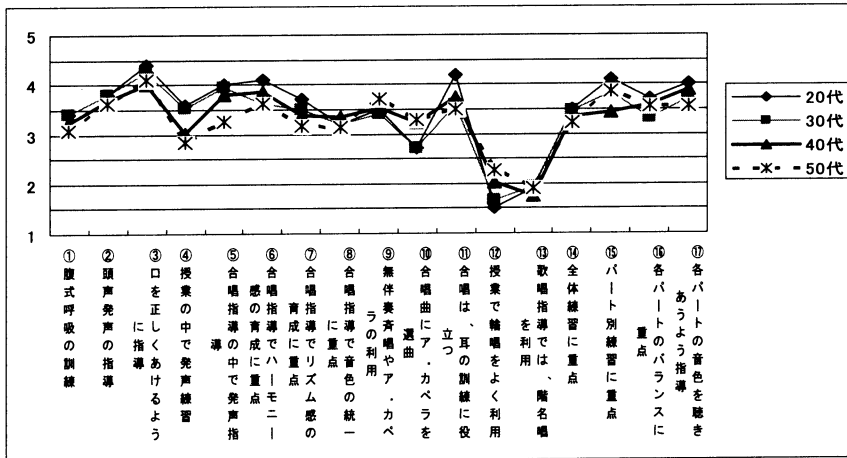


図18 質問4：の平均値（年代別）

質問4「合唱指導」に関して、図16が示すように、最も平均値が高いのは「③口を正しくあけるよう指導している。」、で次は「⑰各パートの音色をお互いが聴きあうように指導している。」、次は「⑥合唱指導でハーモニー感の育成に重点をおいている。」、であった。逆に最も平均値が低いのは、「⑬歌唱指導では、階名唱を取り入れている。」、次は「⑫授業で輪唱をよく取り入れている。」、であった。この結果から、教師が合唱指導で最も重点をおいているのは「③口を正しくあけるよう指導している。」で、これは歌唱の最も基本的な指導であり、多くの教師が必要と考えていることがわかった。次に「各パートの音色をお互いに聴きあうよう指導している。」に関して、教師は重視しているが、図13、14、15をみると現実の授業では達成できていないことがわかった。図16によると、合唱指導で育てたい能力として「ハーモニー感」を考えていることもわかった。図18（年代別）によると、「④授業の中で発声練習を取り入れている。」が低く、「⑤合唱指導の中で発声指導をおこなっている。」が高いことから教師は、臨機応変に発声指導を行っていることがわかった。「⑩合唱曲にア・カペラを選曲している。」では、40代、50代に比べると20代、30代が低いことがわかった。「⑫授業で輪唱をよく取り入れている。」という質問の5段階度数比でみると「1全く当てはまらない」が37%、「2どちらかといえが当てはまらない」が39%で、全体の76%をしめた。次に「⑬歌唱指導では、階名唱を取り入れている。」の5段階別人数比をみると、「1全く当てはまらない」が50%、「2どちらかといえば当てはまらない」が30%で、全体の80%を占めた。筆者は、「輪唱」は、合唱の初歩的は訓練として、活用されているのではと考えていたが多くの教師は、そうではないことがわかった。ア・カペラの利用に関しても若い教師の方が積極的に導入しているのではと考えていたが、ベテランの

教師の方に積極さがみられた。「階名唱」についても現在の授業ではあまり行われていないという結果であったが、授業時間の削減や小学校での読譜指導などに原因があると考えられる。次に質問4：「合唱指導」に関する17項目について因子分析をおこなった。基本方針として回転後の因子パターンにおいて絶対値 .40以上の因子負荷量を示した項目の内容を中心として因子を解釈することにした。その結果、3因子解が適当であると判断した。この時の累積説明率は、3因子合計85.2%であった。因子1は、合唱指導のハーモニーに関する項目であるので「ハーモニー」と命名し、因子2は、発声指導に関する項目であることから「発声」と命名し、因子3は、ア・カペラに関する項目であることから「ア・カペラ」と命名した。因子分析の結果を、表2に示す。

表2 質問：4に関する因子分析表

因子	質問項目	因子負荷量		
		1	2	3
第1因子 ハーモニー	17 各パートの音色をお互いが聴きあうように指導している。	.370	.150	.216
	8 合唱指導で音色の統一に重点をおいている。	.406	.098	.238
	16 各パートのバランスに重点をおいている。	.410	.062	.059
	6 合唱指導でハーモニー感の育成に重点をおいている。	.372	.372	.218
第2因子 発声	4 授業の中で発声練習を取り入れている。	.141	.369	.133
	5 合唱指導の中で発声練習を行っている。	.341	.365	.144
	1 腹式呼吸の訓練に重点をおいている。	.179	.365	.296
第3因子 ア・カペラ	10 合唱にア・カペラを選曲している。	-.065	.090	.334
	9 無伴奏斉唱や無伴奏合唱（ア・カペラ）を取り入れている。	.042	-.050	.195
	11 合唱指導は、耳の訓練に役立っている。	.334	.195	.195

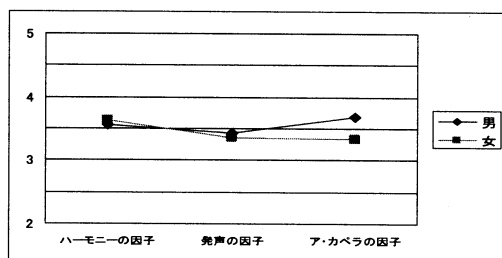


図19 男女因子別平均値

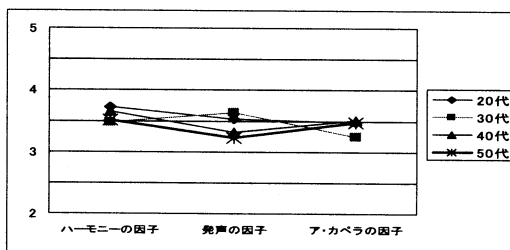


図20 年代ごとの因子別平均値

図19によると、「ア・カペラ」の因子別平均値に差がみられた。このことから男性教師の方が女性教師よりも「ア・カペラ」をより多く授業に取り入れようとしているといえる。図20によると30代は「発声因子」は最も高くなっているが、「ア・カペラ因子」は最も低く他の年代と逆であった。50代、40代は、「発声因子」が低く、40代、50代、20代は、「ア・カペラ」の因子が高いことがわかった。このことから年齢の高い教師の方が「ア・カペラ」を授業に取り入れているとうかがえる。3因子が得られたので、これらの因子別得点に有意差があるか検討するために分散分析をおこなった。3因子に関して性別×年代別の分散分析をおこなったが、男女間にも年代間にも有意差はみられなかった。

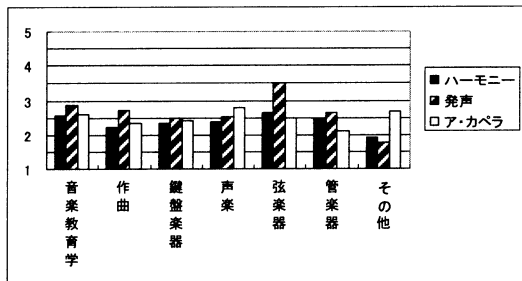


図21 専門ごとの指導法とア・カペラの平均値

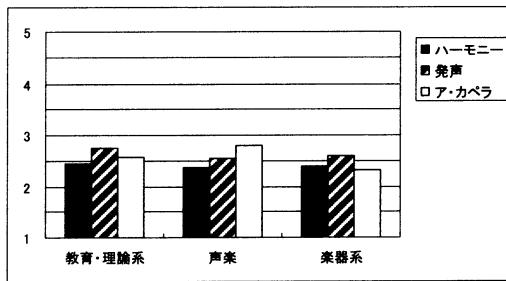


図22 教育・理論系、声楽、楽器系ごとの平均値

次に（図21）、ハーモニー、発声、ア・カペラの3因子に関して専門別ごとに考察した。その結果、全体的な傾向として「ハーモニー因子」、「ア・カペラ因子」よりも「発声因子」の得点が高いことがわかった。特に弦楽器にその傾向が強かった。逆に「ア・カペラ因子」が高いのは、声楽とその他であった。図22では、専門を「教育・理論系」（音楽教育系、作曲、その他）、「声楽」、「楽器系」（鍵盤楽器、弦楽器、管楽器）の3つに分類し、それぞれハーモニー、発声、ア・カペラで比較をした結果、教育・理論系と楽器系では、「発声因子」の得点が最も高く、声楽では、「ア・カペラ因子」の得点が最も高かった。この結果から全体的に、「発声」に力が入られた指導が行われており、「ハーモニー」、「ア・カペラ」は、あまり導入されていないことがうかがえる。

6 質問：8 「ア・カペラ」を授業に取り入れることに対する回答

（1）ア・カペラについての自由記述

表4 ア・カペラについての自由記述

①ア・カペラを取り入れることに賛成 95人(78%)
(理由) 聴く姿勢が育ち、聴きあいができるようになる。(自分の声、他のパートの声) 耳を育て、耳の訓練になる。 音程を正確にとれるようになる。 集中力がつき、周囲や全体を考えられるようになり、心の成長につながる。 音色の統一感、和音感覚、リズム感が育つ。 合唱技術の向上につながる。
②条件付きでア・カペラ導入に賛成 22人(18%)
(理由) 生徒の実態に即した指導と難易度の教材を使った指導が必要 生徒が声をだせるようになり、ブレスがしっかりしてから導入する。 伴奏付きである程度歌えるようになってから導入する。 技術がともなってから導入する。 魅力的な教材を見つけるのが難しい 部分的に取り入れているが難しい 伴奏がないと、現実的にはなかなか音程が取りづらい。 変声期、変声中の中1には、導入しづらい。
③ア・カペラ導入に反対 5人(4%)
(理由) 週1時間では、良さを理解させたり、深めるのは難しい。 実態として、難しい(ハーモニーの理解、互いの聴きあい)

音程が下がってしまい、難しい。

ア・カペラを授業に取り入れることに賛成は、78%で、条件付き賛成18%を加えると96%の教師が肯定しているのがわかった。年代別では、30代の教師は全員(100%)、ア・カペラ導入に賛成、条件付きに賛成であったが図18によると、授業への導入は、最も低いことがわかった。50代(96%)、40代(91%)の教師もア・カペラ導入に賛成、条件付き賛成であった。この結果から、教師がア・カペラの良さを、十分認識しながら導入に至らない理由を考察すると「音程が取りづらく、難しいと感じている。」、「中学生が親しめるア・カペラの曲が少ない」、「指導の時間が足りない。」になると思われる。

IV. まとめ

- 1 A 県中学校では、授業の中での合唱活動が88%で20分以上であった。行事としての合唱活動は、98.3%の学校でおこなわれていた。
- 2 合唱の意義は、「生徒同士の協力関係」、「学校行事との連携」、「生徒同士の心のふれあい」、であった。
- 3 教師の生徒への接し方は、親和的であり、授業の雰囲気づくりに心をくだし、生徒が積極的に歌う授業づくりに努力している姿がみられた。
- 4 指導法では、「口を正しくあける。」、「各パートの音色をお互いに聴きあうように指導している。」を重視し、発声に力を入れている様子がかがわれた。「聴きあい」に関しては、現在の授業では、あまり達成できていないことがわかった。
- 5 「ア・カペラ」導入に関しては、賛成の教師が多いものの、授業には、あまり活用されていないことがわかった。

今回のアンケート結果から、多くの教師が合唱の意義を「生徒同士の協力」、「生徒同士の心のふれあい」をあげていた。今後、筆者も「合唱」で育つ力を「集団」との関わり中であらえ、実践例を分析しながら「集団で育つ力」について検討する。また「ア・カペラ」で育つ力にも着目し、実践例を分析しながら、活用の仕方を研究したいと考える。

参考文献

- ・ 岩崎洋一 「合唱指導法Ⅱ－具体的な指導法」『福岡教育大学紀要』第44号第5分冊 1995 pp.1-9
- ・ 草下實 「合唱指導法(1)」『作陽音楽大学研究紀要』第21巻 1988 pp.125-150
- ・ 高野敦 「松下耕の合唱における基礎的能力の育成－混声合唱のためのア・カペラエチュードを基にして－」鳴門教育大学大学院学校教育研究科修士論文 2005
- ・ 渡辺絵理子 「中学校・高等学校の合唱活動に於ける指導者の指導方略に関する研究」広島大学教育学部音楽科卒業論文 1995
- ・ 吉富功修 岩崎英子 「スクールバンドの指導者に関する研究(1)」『日本吹奏楽学会研究紀要』第5号 1995 pp.82-99